

電子メディアにおけるコミュニケーション能力 ー合意形成の様相に注目してー

上田 祐二

1. 研究の目的

インターネットや携帯電話といった電子メディアにおけるコミュニケーション(以下、ネット・コミュニケーション)が、社会生活においてだけでなく、子どもの日常生活においても今後ますます浸透していくことが見通せる今日において、そうした環境を視野に置いた指導の試みは、国語科教育においても重要な課題になるとと思われる。

しかしながら、これまで国語科の学習指導においてネット・コミュニケーションの能力の伸長を図ることについては、じゅうぶんに取り組まれているとは言えない。現行の中学校国語教科書を例にあげれば、Web ページや電子メールについて取りあげられてはいるが、それは情報を活用するための情報源として、あるいは手紙文・通信文の一形態としての紹介にとどまる。ネット・コミュニケーションにおける齟齬や軋轢が、双方向的なインターネットのサービスにおいて生じているという現状を考慮すれば、国語科教育においても電子メディアをその双方向性に着目してとらえていく必要があると思われる。

以上の問題意識にもとづき、本稿では、ネット・コミュニケーションの様相を明らかにし、それを展開するために求められる能力をとらえてみたい。

2. 研究の視点

音声言語と文字言語との対比からその特性をつかむことの多い国語科教育では、文字言語による表現は、音声言語ほど双方向性の視点からとらえられてこなかった。もちろん、大内善一(2001)のように、書くことの学習に双方向的な場面を導入する試みは見られる⁽¹⁾。しかしながら、今日の電子メディアは、音声言語においてこれまで想定されていた双方向的な言語空間を、書くことにおいて具現化している。

では、電子メディアが言語とその場面性との対応関係を曖昧にするのだとすれば、電子メディアにおける言語はどこに位置づけるのか。この点について船木亨(2005)は、電子メディアにおいては、メッ

セージがパロールであるかエクリチュールであるかについての混同が起きる。その混同は、理性の内部における正しさの葛藤を生み出し、理性を無効化する。それゆえ電子メディアにおける振る舞いの正しさを理性に訴えることはできないと論じている。ここで船木は、電子メディアにおける「言語の新たな『正しさ』」⁽²⁾が形成される可能性を見ているのだが、こうした議論を引き受けるならば、音声言語・文字言語によるコミュニケーションの場面性のどちらとも異なる第三の言語空間としてネット・コミュニケーションをとらえていく必要がある。

しかしながらそうした第三の言語空間の形成が過渡的な現状においては、これまでに獲得した音声ないし文字言語によるコミュニケーションの「正しさ」をもって、それに参与するほかない。したがって、かりにネット・コミュニケーションにおいてそうした「正しさ」が無効化されるのだとしても、むしろそこで音声言語・文字言語がどのように変質するのか、にもかかわらずどのような試みはコミュニケーションの展開に寄与するのかを見ることによって、電子メディアの言語空間におけるコミュニケーションの「正しさ」に迫れるのではないと思われる。

これまでもネット・コミュニケーションの表現については、たとえば音声言語に見られる表現や、標準的な文章には見られない表記が多用されるなどということはよく指摘されている。特に絵文字・顔文字は、声や表情から伝わる表現のニュアンスの欠落を補うための工夫である。これらは、佐竹秀雄(2005)によれば、親密な人間関係であるときや、話しかけるように書くという意識が強いときに表れる⁽³⁾。それにもとづけば、こうした表現は、音声言語における双方向的な場面性への文字言語による適応としてとらえることができる。また教育研究においても、ネット・コミュニケーションを活用した学習を活性化する方法策として、対面的な学習機会を持つこと⁽⁴⁾や、そこで人間関係を構築しておくこと⁽⁵⁾の重要性などが指摘されている。これらは、ネッ

ト・コミュニケーションに対面性を補完することによって、そこでの書くことを双方向的なものとして成立させようとする試みだと考えられる。

こうした動向を踏まえるならば、国語科教育においてもさしあたり、音声言語における双方向性の視点からネット・コミュニケーションをとらえていく必要があると思われる。音声言語によるコミュニケーション能力については、村松賢一（1998）や山元悦子（2007）がその構造化を試みている⁽⁶⁾。それらに共通するのは、協働的に合意形成を図る状況の構築力が重要視されている点である。すなわち、他者との人間関係を調整しながら円滑にコミュニケーションをすすめる力であり、コミュニケーションの流れを把握し、適切な方略で合意形成を図ろうとする力である。このような状況の構築力は、ネット・コミュニケーションにおいてもきわめて重要である。というも、ネット・コミュニケーションの特質は、状況を把握するための情報が欠落した非対面性にあるからである。したがって、身体や場からの情報に頼ることなく、話題の流れを把握したり他者に配慮していることを示す何らかの指標をメッセージに付与しなければならないと考えられる。

そこで本稿では、考察の視点として合意形成に働く発言に注目する。合意が形成されたと把握できるためには、コミュニケーションの参加者が互いに他者の発言を了承したことを示す文脈が形成される必要がある。その文脈はどのように形成されるのか、また、それにはどのような発言で話題を展開させることが求められるのかをとらえてみたい。

3. 研究の方法

3.1. 調査の概要

まず、ネット・コミュニケーションの様相をとらえるために、大学生を対象として調査を行った。口頭による話し合いとの対照を踏まえるために、同一課題について、口頭またはネットにより、2回の話し合いを連続して行わせた。

(1) 調査対象

調査は、2006 年 6 月・12 月に行った。いずれも国語教育を専攻する大学生を対象とした。第 1 回は、学部 2 年生～大学院生の 9 名、第 2 回は、学部 1～4 年生の 12 名について、学年を異にする 3 名により、次表のようにグループを構成した。

グループの性質については、大学で日常的に顔を

話し合い (1)	話し合い (2)	グループの略称	第 1 回	第 2 回
口頭	口頭	OO1	1	0
口頭	ネット	ON1～3	1	2
ネット	口頭	NO1～2	1	1
ネット	ネット	NN1	0	1

合わせる間柄であり、上下関係は発言への緊張感に影響しないと思われる。また、パソコンの操作も、個人差はあるが、話し合いに支障がない程度の能力を全員が備えている。ただし、掲示板によるやりとりの経験が豊富な学生が ON1, NO1, NN1 に含まれており、特に、NN1 は総じて熟練度が高い。

なお、ネットにおいて匿名で話し合わせたグループもあるが、調査後に発言者が特定できたとの報告があったので、考察ではその要因は考慮しない。

(2) 調査手順

- ①. デヴィッド・ウィーズナー『かようびのよる』徳間書店、2000 年（見開き 1 場面・全 17 場面）を配布し、「この絵本からお話を考えて、グループで 1 つの物語を作成するために、どのような物語を作るかを話し合う」という課題を示す。
- ②. 個人で絵本に対する気づきを記録用紙や絵本の余白に書き込む（10 分）
- ③. 話し合い（15 分×2 回）

なお、ネットにおける話し合いは、インターネットのゲストブック（Yahoo! JAPAN）を利用した。

3.2. 口頭による合意形成の様相

考察にあたり、まず、口頭によるコミュニケーションの合意形成の特徴を、以下の手続きによって類型的にとらえた⁽⁷⁾。

- ①. 合意形成の基準を、話題が転換するまでにある程度の発言の接続が認められること、加えて、話題に対するとらえ方を同意・肯定したり、あるいは共有したとみなせる発言を参加者それぞれがしていることとする。

- ②. 個々の発言の機能を、直前の発言内容に対してどのような関係にあるかという点から分類する。

- ③. 発言の機能がどのように推移する傾向にあるかを把握する。

その結果、4 つの類型を見いだすことができた。

- A. 累加型：複数の話者が交互に、発展的な内容の発言を重ねながら類似した考えを表明し合うことによって、合意が形成される。
- B. 同調型：先行する発言の途中から、その発言の意図を受けて他の参加者が補填的にことばをつなぎ合うことによって、合意が形成される。

C. 応答型：主導権をもつ参加者の発言に対して、あいづちや単純な応答を示すことによって、その考えが承認され、合意が形成される。

D. 確認型：合意事項を明示して、参加者からの確認をとることによって、合意が形成される。

話題の展開にしたがって、これらの類型が推移する傾向を見ると、口頭によるコミュニケーションにおける合意形成について、以下の特徴が把握できた。

(1) 対面状況におけるゆるやかな合意

全体的に A や C の類型で合意が形成される傾向が確認できた。これは、明らかに合意されたというよりも、否定するほどの根拠がないとか、その判断をしないという雰囲気の中で発言が受容されていくことを示している。これは、対面状況からそうした雰囲気を認識できるためだと考えられる。

(2) 総括的・論理的発言による話し合いの役割形成

提出された発言を集約する総括的発言や、意見の根拠を伴う論理的発言をとる参加者が、話題の展開において中心的な役割を担うようになるという傾向が観察された。その理由として、前者が司会として話題の展開を統御し、後者が発言の説得力によって合意事項になりやすいというように、話題の展開を牽引する力として働くからだと考えられる。

(3) 状況における即興的な関係構築

(2) における話し合いの役割取得は、話し合いに先行する上下関係から生じやすいとも考えられる。しかし本調査におけるその制約は弱い。実際、話し合いの途中で役割が受け渡される例もあり、むしろ話し合いにおける役割は、状況において即興的に構成されると考えられる。

3.3. ネットにおける合意形成の様相

口頭による場合に比べて、ネット・コミュニケーションにおける発言量は著しく少ない。そのため、一連の発言の流れから合意形成の類型をつかむのではなく、発言内容から接続の様相をとらえることによって、合意を図るための方略的特徴をつかむことに分析の中心を置くこととした。

掲示板の発言とその接続の様相を図表に示した。掲示板の発言は時系列に表示されるが、返信モードの書き込みは元の発言の直後に表示される。図表では、発言の時間的順序を左端に、返信は「接続」の項に「○」のドットで示した。また、「接続」を示す矢印はその方向性、点線は発言の結びつきが弱いことを表している。なお、一つの書き込みに複数の

話題をまとめて述べているものについては、話題に応じて発言を区切り、それぞれの接続を判定した。

4. 考察

ここでは、3.2 でとらえた特徴に対照させながら、ネット・コミュニケーションにおける合意形成の様相について述べる。

4.1. 合意を明示する手続きの必要性

3.3 でも述べたように、ネット・コミュニケーションの様相は、口頭による場合と大きく異なる。調査後のアンケートでは、「発言内容と投稿時の話題の展開とのずれ」(12 名)、「中心的话题のつかみにくさ」(5 名)、「タイピングの速さ」(4 名)といったネットにおける発言の難点が指摘された。ここから、発言にかかる時間と、それにより錯綜する話題の展開とが、話し合いの様相に影響していると考えられる。

この影響は、累加型で発言が接続するだけでは、ネットにおいて合意形成されたと感じにくいことに表れている。たとえば〈NO1〉では、「カエルの地球侵略」というアイディアがゆるやかに合意されているように見える。しかしながら第 2 回の口頭による話し合いでは、合意を前提とせず、あらためて同じアイディアが提案されている。

【〈NO1〉の発言と接続の様相】

		接続	発言内容
2	f4	●	前半はあまり内容が浮かびませんでした；；亀やカラスがびっくりしてることか、蓮の花が閉じてることや、後ろの丸いの（月?? 太陽??）とか気になるんですけど。何で飛んだんだろう；（困かえるも楽しそうだし、よくわかりません・・・；；
3	f3	●	「かようびのよる」から、童謡? 「おもちゃのチャチャチャ」を連想しました。かえる達は、人の暮らしに勝手に入ってくる、しかもなんかふざけた侵入者のように感じました。まさにテロリスト。
4	m2	●	なんか「エイリアン」を思い起こされるのですが?
5	m2	●	カエルは飛んでないのではないですか? 最後に蓮の葉から落ちてるので、蓮の葉が飛んでるのではないかと思うのですが。ちなみに、タイトルの絵も蓮の葉なので何か関係があると思いますか?
6	f4	●	そうですね・・・①見ると、突然葉が飛んじやって、最初はびっくりしたけど、だんだん乗りこなせて楽しい! みたに見えます。蓮の開閉（③は閉じてて、②と④は開いてる）のは意味があるのですね? 豚と蓮は関係なさそうですが・・・
7	f3	●	宇宙人の侵略みたいにもみえませんか? ⑥の場面のことで、何かが起こりそうなかんじはします。あと、明らかにカラスはかえるにびびっていると思います。丸いのは月だと思えます。満月です。そして、絵本の色は全体的に暗いのにかえるは楽しそうです。ありえないことが起きていると思います。
8	m2	●	なるほどー。ではカエルの地球侵略の話ということですか? それもおもしろそうですね。はじめそのように考えて、恥ずかしくていえませんでした。
		●	f4 さんへ 蓮の花が閉じている間だけの魔法なのでしょうが?
9	f4	●	そういわれて見ると、カエルは葉を運転しているように見える笑

- (f3) こういうなんか、こういう気がした。カラスもびっくりする、感じ。
 (m2) でも逆さまになってるからね、明らかに UFO だね。
 (f3) あ、でも、たぶん、あれじゃないですか。モデルはそんなキャラじゃないですかー地球侵略系じゃないですかー
 (m2) じゃあ、地球侵略か。
 (f4) 乗りこなしてますね。
 (m2) うん。

それに対して、口頭からネットの順で話し合ったグループでは、2 グループに口頭でのゆるやかな合意事項が、ネットにおいてたしかに了解されていることが確認できた(〈ON2〉-3)。このように、線条的な展開ゆえに話題の転換点がわかりやすく、その時点でのコンテキストから合意の手がかりを得られる口頭によるコミュニケーションとは異なり、ネットにおいては、錯綜した発言の累積から話題の展開と合意のポイントを見出すことに負担がかかる。その負担が発言にかかる時間に影響し、その結果、発言量にも影響を与える一因になったと推察される。

したがって、ネットにおいては、話し合いの展開を把握するための、何らかの指標が必要になると言える。特に、合意形成に関して言えば、何らかの意思表示をしない限り、発言を否定されていないと同時に、承認されたとも読みとれないのである。

半数のグループには、ネットにおいて参加者の意思を何らかの方法で把握して合意形成を確認する発言が見られなかった。その場合、単発的な発言が散漫に表れたり、発言に接続関係はあるがいくつかの話題が並行して展開しており、合意によって話題が終息したとは読みとれない(〈NO1〉〈ON2〉)。

それに対して、合意形成を図りながら話題を展開しているグループでは、次のような手だてが観察された。一つは、総括的に合意事項を示すという手だてである。たとえば〈ON1〉-16「そこで②はなしで③に入れそうですね」は、②場面に関する各参加者の発言内容を集約することによって、その話題の終息と次の話題への展開とを参加者に意識させるうえで有効に働いている。もう一つは、参加者から明白な合意の確認をとるという手だてである。同じく〈ON1〉-9～16では、f8が、発言9の自己の提案に対する他の参加者の合意を確認したことが、③場面の検討へと話題が展開することに役立っている。

【〈ON1〉の発言と接続の様相】

		接続	発言内容
6	m4	●	>f8 さん ああ、なるほど。それは面白そうですね。 私は、浮かんでいく蛙たちを見ている語り手の言葉で始めようかなー、などと考えていました。「おや、蛙たちが…」とか。
7	f7	●	それじゃあ、②だとどんなかんじですかね。 映画とかならオープニングが流れる感じとか、ナレーションがはいるとかですかね？
8	f8	●	>m4 さん 語り手の言葉もいいですね。組み合わせるのもいいと思います。
9	f8	●	>f7 さん ②はどうしたらいいですかね。 私はタイトルのページなんでもなくともいいかとは思いますが…どうですかね
10	f7	●	それだったら、最初に蛙の言葉がきてから、語り手が入るのとかはどうですか？
11	m4	●	まず、ストーリーの語りはどうやりますか？ f8 さんのように、カエルたちの会話文で進めるのも面白そうですね、さっき言ったように、第三者的な視点からの語りって方法もありそうな気がするのですが。両方組み合わせるというのもアリですね…。 どうでしょう？
12	f7	●	>f8 さん そうですね。それじゃあ、②はなしでいいですか？
13	f8	●	>f7 さん いいですね。まず会話から入ってということですね。蛙「空を飛んでるよ」語り手「おや蛙たちが…」みたいな感じですかね
14	f8	●	>f7 さん 私は②はなくてもいいと思いますが…m4 さんはどうですか？
15	m4	●	はい、それでもいいと思いますよ。
16	f7	●	>f8 さん そこで②はなしで③に入れそうですね。 ③は会話するのが難しそうだから語り手のみで日が沈んでいく様子を説明するみたいなかんじとかはどうですかね。
17	f8	●	>f7 さん そうですね。③は語り手の情景描写だけでいいと思います。

ただし、かならずしも明白な合意の確認が必要だというわけでもない。たとえば、〈NN1〉-14における f12 の総括的発言は、自己の発言 9 に対する発言 11 における m8 の賞賛を受けたものである。それに対して、f13 は同意を示していない。しかし、f12 には、発言 9「あたしも f13 と同じこと気づいた」というように、f13 のアイデアに沿った発言をしているという意識がうかがえる。したがって、m8 による発言 11 の段階で合意が取れたと推察したのだと解釈できる。こうした推察にもとづく合意の認識は、口頭の場合にも見られるものではあるが、ここでは発言 14 においてその推察の結果を表明することによって、合意されたという認識を参加者が共有できるようになっている。

4.2. 発言の機能と役割取得との関係

3.2 において、総括的発言や論理的発言が、口頭

による話し合いを展開するうえで中心的な役割の取得に関わることを指摘した。ネットにおいても、4.1でも述べたように、総括的発言は、話題を展開させるための重要な発言として機能する。また、話し合いにおける中心的な役割がその展開において即興的に構成されるという点についても、口頭による場合と同様な例が確認できた。たとえば〈ON1〉の話し合いの冒頭では、最上級生の m4 が「はい、というわけで話し合いの続きをしましょう」と切り出して司会を務めようとしている。しかし、f7 の総括的発言 12 を契機に、その役割は交替している。

それに対して論理的発言は、参与者間の役割を生み出すようには機能していない。というのも、そもそもそうした発言が特定の参与者に集中するという傾向そのものが見られないからである。何らかの根拠を伴う論理的発言が最も多い例として〈NN1〉(14 発言: 42%) があるが、そこでは参与者がほぼ均等に論理的発言を行っている。

しかし別の観点から見ると、論理的発言には話し合いにおいて重要な働きがある。たとえば〈NN1〉における論理的発言は、発言 4～9 と 22～26 に集中しており、およそそのどれもが「カエルの飛行能力は持続するのか」「飛行するカエルに人間が気づいているか」という話題について、挿し絵の読みを根拠に検討しようとする発言である。こうした論理的発言は、飛行能力の持続力や、それに対するカエルと他の登場人物との認識の違いを明らかにすることに役立っている。そしてこうした発言のやりとりが、「カエルは今までこの能力を持っていたけど、街にはでなかった。それで、今回街にでたことによって、豚にも能力がうつったって考えるとどう!？」という発言 26 のように、テキストに整合しつつ、一貫した物語の設定を発想することに貢献している。

とはいえ、発言の機能と役割取得との関係には、グループの性質の影響も考えられる。3.1 でも述べたが、本調査における上下関係はそれほど強いものではない。また、ネットにおいてはまとまった考えを発言しようとする意識もアンケートからうかがえた(3名)。したがって、発言の機能による役割の移行を抵抗なく受容できる意識が共有された状況において、話題について熟考したうえで発言するために、上下関係を問わず、話し合いの展開に有効な発言を相互に行い得たのだと考えられる。しかしながら、ネット・コミュニケーションでは、しばしばこ

【〈ON2〉の発言と接続の様相】

		接続	発言内容
4	m5	●	すみません笑 ④「夜の世界でかえる達はとてもいきいきしています。」 ⑤「他の動物たちは驚きをかくせません」みたいなのですか?
2	f10	●	自分ののはっぱにのってまちにやってきました
3	f9	○	今までのまとめ。かきょうび、夜8時ごろ… 「今日街行こうよ。」「いいねえ。」今夜の主役はカエルたちのようです。
5	f9	●	んじやf10ちゃんのやつに主語を付けて、「カエルたちは自分の葉っぱに乗り、まちにやってきました。」は? さすがのカラスもこれには驚いたようで、いつせいに逃げ出します。とか・・・
6	f10	●	カラスはびっくりしました
7	f10	●	いいと思います
8	f10	●	いいと思います
9	f10	●	まちにとうちゃくしました

うした人間関係を前提にできないことを考慮すれば、これらの発言の機能が、話し合いの展開と参与者間の関係構築に有益に機能する可能性は指摘してよいと思われる。特に、こうした話し合いが、熟練者からなる〈NN1〉に見られたことは、ネット・コミュニケーションにおいて違和感のない振る舞いとして意識されていたとも考え得る。

4.3. 発言の関連づけによる状況の構築

4.1 では、ネットにおける話題の展開把握の難しさを軽減する指標の必要性について指摘した。しかしそれは同時に、そうした指標に気づくとともに、錯綜する話題の展開から文脈を構築しながら話し合いに参与する必要があるということでもある。

ネットにおける錯綜する話題展開の様相について、本調査では次の事例を指摘できる。〈NO1〉では、カエルの飛行について、地球侵略のためだとするアイデアと、蓮の葉の魔法によるものだとするアイデアとが示され、カエルの飛行が意図的かどうかという点で矛盾する話題が複線的に展開している。また〈ON2〉では、④～⑥場面での他者のアイデアに対して f10 が同意する発言を 7・8 でしているが、自己の発言との関わりが明確でないために、それらとは別に、モノロゲ的に接続を生み出しているように見える。このようにネットにおいては、話題の展開にしたがって何らかの発言の整理を行わなければ、話し合いの文脈が錯綜してしまいやすい。

こうした様相から展開を再構成する手だてとしては、次のような振る舞いが観察された。まず、〈NN1〉-17 では、話し合いを統括する役割が要求されている。これは、展開を整理する指標として総括的発言の内容を共有することによって、合意事項を調整し

【〈NN1〉の発言と接続の様相】

前半		接続関係	発言内容
3	f12		かようびのよる8時から朝までは、動物が飛べるようになるってのが話の内容!? どう思いますか!?
4	f13		かえるが飛んでいるのは、蓮の葉の力（飛ぶためのアイテム）なのかな、って思ったんですけど、豚はそういうのが無くても飛んでるんですよね…。あとは、飛んでいるかえるに人間は気づかないけど、動物は気づいてるのかな? って思いました。内容としては、火曜の夜は何か特殊能力が働く、っていうような話かと。
5	m8		おおまかに見ればそういうことですね! あとはなぜ飛ぶのかってことですかね!? 最初はカエルの侵略かと思いましたが、朝までだとほんととも・・・
6	m8		>f13 でも⑦で人間カエルに気づいてない?
7	f13		しかも、飛べるのはかえるに限ったことではなく、毎週違う動物のようなので、かえるとか豚が「今日は飛べる!」っていうのを意識しているかによっても、なぜ飛ぶのかは変わってくるのでは?
8	f13		>m8さん これって、やっぱり気づいてますか…? 見えてるのか見えてないのかって微妙な絵ですね。でも、8時から飛んでいて、人間に見えていたら、翌朝まで待つことなく大騒ぎになりそうじゃないですか?
9	f12		あたしもf13と同じこと気づいた!! カエルが飛んでいるのは、葉のおかげなんだよね!! 絵の⑬みたら分かるのとおり、葉から落ちたかえるは飛べないんだよね。でも、豚は単体で飛んでいるのはなんでかなーって思いました。あたしの予想は、カエルは元々かようびに飛べるっていうのを知っていたと思う。んで、街に出て、その能力が豚にもうつったとかいう話はどう!? 豚は初めて飛ぶから、⑯の絵のようにぎこちない飛び方なんじゃないかな。
10	m8		飛ぶのは毎週火曜の特典みたいな感じでしょうか? 自然の世界から人間の世界にまで侵入できて、なおかつテレビを見たり、マントつけたり、鳥追い回したりと普段できないことを楽しんでいる感じがします。日常から自由を求めての火曜日の脱出? みたいな感じですかね。
11	m8		f12 さんうまい!!
12	f12		⑦の絵の男気づいているか気づいていないかびみよーだね。でも、気づいてたら、もつとびっくりしている顔になるのかな。やっぱ気づいていないってこと!?
13	f13		日常からの脱出、って言うのは良いと思います。豚の飛び方がぎこちないって言うのは気づきませんでした。でも言われてみれば…
14	f12		m8 ありがと!! じゃ、みんなの話まとめると、かようびは特殊なことが起こる日ってことでいいんだよね!? あとは、人間が気づいているか、なぜ、豚も飛べるようになったかの2点について考え深めていきますか!!
15	m8		映画のジュラシックパークでよく出そうな顔ですね。若干気づいているけど信じたくないみたいなかんじでしょうか? 気づいてないならもっと単純な絵でいいと思うんですが・・・

16	f13		⑦の男は、なんかおかしいなあっていう気配（見たいなの?）には気づいているけど、かえるが飛んでいるって言うことには気づいていない。くらいのかんじじゃないでしょうか?
後半			
17	m8		f13のいうこと納得できる! ありあり!! あと連絡ミスが多いのでできるだけf12さん発信でまとめていきませんか? 僕は、人間は気配には多少気づいているけど姿そのものは見えて無いと思います。豚は・・・なぜですかね? 笑
18	f12		ちょっと話題を変えて、、カエルに追っかけられている犬は、⑤に出てくる犬と一緒に!?
19	f13		じゃあ、次の火曜には豚もかえるも飛べるんですよね? かえるが飛べるのは毎週だけど、他の動物は1回限りの効果(?) っていうことでいいのでしょうか?
20	f13		かえるは1匹だから追いかけるけれど、大群で反撃に出たら犬もびっくり! ってことでは?
21	f12		f12さん発信に賛成です。
22	m8		f13のほかの動物には一回限りの効果ってやつに賛成。 カエルはどうなんだろう!? この能力が他に渡った時点で効果はなくなるのか、そのまま持続して持ち続けるのか。さあどっちでしょう!?
24	m8		犬の件はまあてきとーに流しといて
22	m8		この能力が他に渡った時点で効果はなくなるのか、そのまま持続して持ち続けるのか。この考え無かったですね。僕はボタンタッチみたいな感じに思えます。カエル不服そうな顔してますし。
22	m8		>f12さん そ若干気になりました! 犬が同一であるなら人間に「これはカエルのしわざだ」って言えない感じが絵から感じられる気がします。犬は飛べないんですかね?
23	f13		>f13 カエルは確かに飛び慣れている感がありますね。 そう考えたらカエルも豚も飛ぶんじゃないでしょうか。 でのそうなる毎週火曜の夜はどんどん動物が増えていく気も・・・
23	f13		かえるの効果は持続しないと、かえるが飛ぶのはうまくて、豚はぎこちないって言うののつじつまが合わなくないませんか? あ、でも、1回限りじゃなくて、1ヶ月とか（長期）の効果で、この作品はその効果の継ぎ目（ボタンタッチの日）って考えたら、つじつまあいますね。
25	f13		犬は、似てるけど、夜に警察犬が（警察犬ですよね?）勝手に走り回ってよいのでしょうか??
26	f12		人間は気づいているかの点について。 ⑩で、犬はカエルに気づいているよね。でも、人間は気づいてないってすると、このカエルの能力は人間以外の動物に有効ってことかなあ。 カエルの効果の持続についてカエルは今までの能力を持っていたけど、街にはでなかった。それで、今回街にでたことによって、豚にも能力がうつったって考えるとどう!? 能力のひきわたし!? いになるのかなと...

ようにするものだと考えられる。また〈NN1〉-23 は、直前までの「カエルの飛行能力の持続性」に関する議論に、発言 9→13 に見られた「ブタの飛び方はぎこちない」という話題を関連づけることによって、議論の文脈に新しい視点を与えている。こうした事例からうかがえるのは、発言が前後しながら複数の話題が同時進行するなかで、断片的な発言を編集して話し合いの文脈を構築する能力が、ネット・コミュニケーションでは重要になるということである。

ところで、ネット・コミュニケーションが、文脈構築によって展開するのであれば、逆にその展開は、参加者がそこでの文脈をどう読み取ったかということに依存する。したがって自己の構築した文脈を他の参加者と共有しようとするならば、その文脈を指示する何らかの手だてが必要になると考えられる。

本調査においては、先行する発言の表現を用いる（〈NN1〉-23）、話題を掲げて意見を述べる（〈NN1〉-26）といった方法や、発言の接続関係を名指しによって示す（〈NO1〉-8、〈ON1〉-8）といったネット・コミュニケーションにおいてよく見られる方法によって、文脈の共有を試みているものが見られた。これらはいずれも複線的に話題が展開しているときに表れており、したがってそれらを並行的に処理する方法としても機能している。

しかしながら、名指しという手段については、文脈への参与という点で排他的に働くといったことも観察された。たとえば〈ON1〉-11 は、発言 8 での名指しに応じて①場面の語りについて提案しているが、それに接続する発言がなかった。しかしながら語りの具体例を示した発言 13 に対して応答することによって、発言 10→13 の文脈を共有しながら、話し合いに参与することは可能であったはずである。ところが発言 13 において「>f7 さん」という名指しがあるために、f7 と f8 との間のみに対話的な関係が構築されてしまっている。

このように、名指しが、話し合いの文脈構築に有効に働く一方で、参加者間において排他的な関係を構築する恐れがあるのであれば、ネットにおいては、参加者の発言状況に対する目配りを意識的に行うことが求められると言える。たとえば、4.1 でも触れた〈ON1〉-14 のように、m4 への呼びかけを意識的に行うことは、合意形成を確かなものにするための手だてであると同時に、発言 9→12 において排他的に働いた参加者間の関係を再構築するうえでも

有効に機能すると考えられるのである。

5. 結論と課題

本稿では、ネット・コミュニケーションの様相を、合意に至るまでの発言の接続関係に注目して分析・考察した。最後に、そこから明らかになった結論と課題について述べる。

一点目は、ネット・コミュニケーションにおいて求められる能力についてである。口頭による場合に比較して、ネットにおいては、参加者から合意の確認を取ったり、総括的に合意事項を書き込むなど、話し合いの文脈を明確にしながら話題を展開するための何らかの発言方略が求められる。それは、相手の話につないで話す、話し合いの流れに沿って話すことによって、文脈を共有しながら協働的な話し合いの場を構築するといった、従来の話すこと・聞くことの指導においてとらえられてきた能力にも整合するものである。しかしネットにおいては、複線的かつ錯綜した話題の文脈が履歴として残る。そのため、話すことにおける意図を、ログとして蓄積された先行情報に言及したり関連づけるといった情報編集を伴う書くこと的能力によって文脈化しつつ具体化することが同時に求められる。このように、話すことと書くこと的能力を、コミュニケーションを展開するという目的において統合的に働かせるということが、ネット・コミュニケーションに参加するために必要な能力の一側面であると考えられる。

二点目は、ネット・コミュニケーションにおける参加者間の関係構築についてである。名指しという発言方略に注目した場合、一方で、話し合いの文脈構築において有効に機能する場合もあれば、他方、参加者間の協働的な関係構築の阻害要因として機能する場合もあることが観察された。このことは、ネット・コミュニケーションの指導に取り組むうえで、二つの示唆を与えられると思われる。一つは、ある特定の発言方略が有効に機能するかどうかは状況に依存している。したがって、通信文と同じ枠組みで電子メールを扱うにとどまらず、双方向的なメディアにおいて方略の有効性を経験的に確かめさせる指導が必要になるということである。

もう一つは、双方向的なメディアでのコミュニケーションにおいて他者意識をもたせることの重要性である。ネット・コミュニケーションにおける非対面性が、協働的な関係を構築するうえで参加者に

対する目配りを求めることはすでに指摘した。しかしながら、実際のネット・コミュニケーションは、それへの参与と離脱が自由な状況であり、また、常にROM(Read Only Members)の存在が想定される状況でもある。したがって、今ここで誰がコミュニケーションに参加しているかを確かに知りうる手段はない。しかし、だからこそ各々の参加者が、それに参加している者が誰であるのか、またはあり得るのかという境界を自ら引きながら話すことが求められると言えるのではないか。

このことはまた、発言が他者に及ぼす影響力に対する認識の問題でもある。たとえば、ネット・コミュニケーションにおいては、新しい参加者によって合意事項が蒸し返される可能性を常に孕んでいる。あるいは、そこで構築した関係性においては受容される発言が、その外側の他者にとっては暴力となって働くこともあり得る。こうした事態が招くさまざまな問題は、しばしばモラルの問題としてとらえられる。しかしそれら見えない参加者と協働的な関係を結ぼうとするか、あるいはそれを排除・無視しようとするかは、国語科にとって、たんなる表現やマナーの問題に還元できるものではなく、何を目指して話し合っているのか、また他者とどのような関係を構築しようとしているのかという意識と連関させながら、実際にコミュニケーション方略を試行錯誤させていくなかで学んでいく課題であると思われる。

三点目は、従来の話し合い学習とネット・コミュニケーションとの関連性についてである。口頭とネットとでは、コミュニケーションの様相に違いがあるものの、少なくとも、ネットにおいて有効に機能する総括的発言や論理的発言は、口頭によるコミュニケーションの質を高めるという観点からとらえることができる方略でもある⁽⁸⁾。このことから、話し合い学習において困難な振り返りのための資料として、ネットの履歴を活用する可能性も考えられてよい。しかしながら、調査後の学生の評価では、口頭によるコミュニケーションの方が進めやすい(16名)という回答がほとんどであることを見ても、教室におけるネット・コミュニケーションは、その必然性をもたせにくい。したがって授業においては、ネット・コミュニケーションの学習の意義をよく認識させて、それに取り組ませる必要がある。そのうえでなお、口頭によるコミュニケーションとの異同を関連づけながらそれに参与させることは、ネット

を、変容する言語空間として安易に受容することなく、国語科が志向する理性的なコミュニケーションの成立を図る場としてとらえさせていく学習の方向性であると思われる。

最後に、本稿では成人を対象にした調査の分析によっているが、子どもの場合にはどのようなコミュニケーションの様相となるのか、発達を視野においた研究は今後の課題である。さらにネット・コミュニケーションにおいて働く能力についても、スレッド型の掲示板やチャットなどを利用する場合、あるいは匿名によるやりとりの場合など、さまざまな双方向的な状況においてどのような能力が働くのかを明らかにしていく必要がある。

- (1) 大内善一(2001)『「伝え合う力を育てる双方向型作文学習の創造」明治図書
- (2) 船木亨(2005)『デジタルメディア時代の《方法叙説》-機械と人間とのかかわりについて-』ナカニシヤ出版, p.98
- (3) 佐竹秀雄(2005)「メール文体とそれを支えるもの」橋元良明編『講座社会言語科学2-メディア-』ひつじ書房
- (4) 望月俊男ほか(2003)「協調学習における対面コミュニケーションとCMCの接続に関する研究」『日本教育工学会論文誌』27-4
- (5) 松田岳士ほか(2005)「同期CMCにおける学習課題に関するディスカッション成立過程」『日本教育工学会論文誌』29-2
- (6) 村松賢一(1998)『いま求められるコミュニケーション能力』明治図書、山元悦子(2006)「聞き話す双方向性のある音声言語活動の学習指導-対話と話し合い-」倉澤栄吉・野地潤家『朝倉国語教育講座3-話し言葉の教育-』朝倉書店
- (7) ここでの具体的な分析については、位藤紀美子(研究代表者)『国語科教育改善のための言語コミュニケーション能力の発達に関する実験的・実践的研究(平成16年度~平成18年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書)』に報告した。
- (8) 山元悦子(1996)「対話能力の発達に関する研究-対話展開力を中心に-」『国語科教育』43

(北海道教育大学旭川校)

2008.3.22 発送